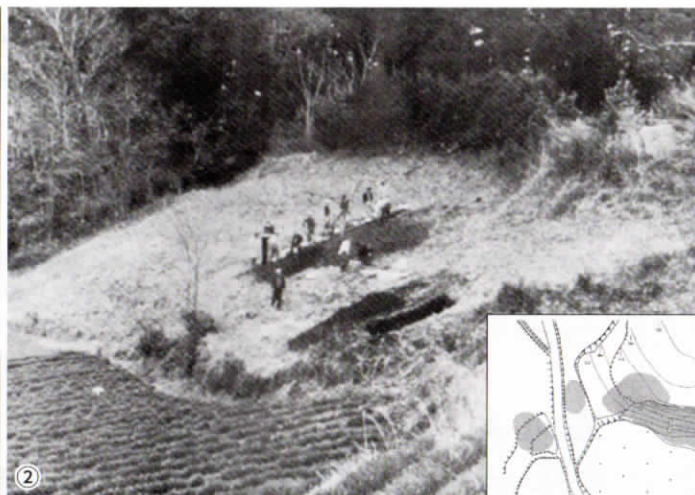


# 香取遺産

vol.133

## 縄文時代中期の大型貝塚 「木内明神貝塚」



②



③



④

①貝塚測量図 ②昭和33年調査風景 ③④出土土器

木内明神貝塚は、木内地区にある木内大神周辺の台地斜面に形成された、縄文時代中期（4～5千年前）を中心とする貝塚です。明治23年に学会に紹介されて以降、多くの研究者がこの地を訪れ、小規模な発掘調査を行いました。正確な記録が残っていないため、どの地点を調査したのかは分かっていません。

本貝塚の本格的な発掘調査が実施されたのは昭和33年です。当時、利根川下流域の貝塚を精力的に調査していた早稲田大学の西村正衛教授により、9日間の調査が行われました。その結果、貝層の厚さは最大2mで、調査面積は狭かったものの、1万点以上に及ぶ縄文土器片をはじめ、土偶、石斧などの石器、ヤスや耳飾りなどの骨角器、貝輪（貝製の腕輪）など、多数の遺物が出土しました。

また、貝塚周辺の測量も行われ、台地平坦部を取り囲む斜面に4カ所の貝層が馬蹄形に形成され、その範囲は東西約130m・南北約120mであることが分かりました。おそらくは、縄文人は台地平坦部に居住し、その周りの斜面に貝殻を捨てたのでしょう。

縄文時代の海岸線は現在より高く、現在の利根川付近に広い内海があったことは良く知られています。出土した貝はアカニシ・ハマグリ・

シオフキ、魚骨はクロダイ・スズキが多く、イノシシやシカなどの獣骨や鳥の骨も見られます。このことから、近くの内海で魚や貝を捕り、山野で動物や鳥を捕獲していたと推測できます。

小見川地区の黒部川を取り囲む台地上には、本貝塚の他に、良文貝塚・阿玉台貝塚・白井大宮台貝塚・向油田貝塚・内野貝塚など、範囲が100mを超える大型貝塚が多く、県内有数の大型貝塚密集地域となっています。これらの貝塚は、台地平坦部を取り囲む斜面に貝層が形成されるものが多いのですが、同じく貝塚密集地域として知られている東京湾沿岸地域の大型貝塚は、台地上平坦面に土堤状に貝層が形成されるものが主体です。

何故このような違いがあるのかは分かっていませんが、本地域の貝塚を特徴づける要素であることは間違いなさそうです。

